

ミンサシャの魔女

夏の夜空、星降る夏の夜空にお願い事をした後は、ベッドの中でこのお話を聞かせてもらうまで、絶対にそのお願い事を言っちゃいけませんよ。

そんなことすると、お願い事がお星様に届くまでに、ミンサシャの魔女に聴こえてしまいますから。

……ミンサシャの小さな魔女に、ほんのちょっとでも長く、紅茶の時間、ハーブのお風呂、そしてなにより大好きなひなたぼっこのお昼寝を楽しんでもらうためにね。

むかしむかし、南の塩湖の周り、塩の害で作物の出来もよくなり人のほとんど住んでいない平原の東はずれに、不思議なナスビ畑がありました。

遠目には小さな村の周りにほんのちょっとの畑があるようにしか見えません。

ですが、その畑にまで近づいて一歩その中に足を踏み込んだ途端、周り一面見渡すかぎり、地平線まで延々と続いているナスビ畑の中に、自分は居るのです。

遠くから見えていた村も、もうどこにも見えなくなっています。

でも、慌てて逃げ出さなくても大丈夫ですよ。

いえ、そんなことしたら余計に迷ってしまうことでしょう。

ほら、ちゃんと看板が立っています、近道はこちら……、と。

その看板の指し示す先にほんの三歩も歩けば、その不思議なナスビ畑はおしまい、小さな村、ミンサシャ村に到着です。

初夏の陽差しも眩しそうに白い小さな花が咲き乱れる一面のナスビ畑……は、村から見れば幅はたったの三歩分だけ、ぐるりと村の周りを囲んでいます。

ミンサシャ村は魔女のいる村です。

小さな小さな、人なら七、八歳にしか見えない彼女は、名前をライナ・イラナ・ライラと言いました。

村の誰も知らないずっとずっと昔から、魔女ライナは村人とおなじような小さなおうちに住んでいます。

村の誰も知らないずっとずっと昔から、魔女ライナは村人に自分の歳は三百歳だと言っていますが、本当はもっと歳を取っているのかも知れません。

そして、村の誰も知らないずっとずっと昔から、このナスビ畑には魔法がかかっていた。

でも、誰もこの魔女ライナが魔法を使うところを見てはいないのでした。

しかも、このナスビ畑を広くしてナスビが毎年豊作になるという不思議な魔法も、自分がかけたものではないと、ライナは言うのです。

けれども、魔女ライナは、魔女ライナ。

ただ歳を取らないだけの不思議な女の子、とは村の人たちは見てはいないのでした。

村の人たちはみんな、誰ひとりとしてライナを魔女ではないと疑おうとはしません。

毎日仲良く、魔女のライナと暮らしています。

ライナは朝、陽の昇る前に起きて顔を洗って歯を磨いたら、ナスビの葉に降りた朝露を集めるために、抜け落ちた猫のヒゲを集めて作った葦の柄の筆と椀の千年樹で作った蓋つきの水入れを持って、ナスビ畑に入ります。

葉の上にちょこんと丸まる朝露を、猫ヒゲの筆でそっと撫でてあげます。

すると、するすると葉の筋にそって朝露は滑り落ち、葉の筋先の下に添えた千年樹の水入れに収まります。

陽が地平線から昇り切るまでに集めた朝露には、夜の間に大地や空気の中、また月や星の光から集められた魔力が、たくさん蓄えられているのだとライナは言います。

でも、眩しい昼の陽の光にあてるとすぐ、その魔力は飛んで消えてしまうともライナは言いました。

だからライナは、集めた朝露に光が当たらないようにしっかりと蓋をした水入れを抱え、陽が地平線から離れてしばらくして、村に戻って来ます。

でもそれが、ただライナの魔力の元だけだと村のみんなは思っていませんでした。

そう、村の人達で、ライナがその朝露をそれ以外の理由でなぜ集めているのか知らない人は、いませんでした。

ライナは、朝御飯を済ますと、うちの前庭に植えたハーブと季節の野菜の世話をお昼まで続けます。

雨季の前、この初夏と呼ぶにふさわしいすがすがしいお天気の日、ふと、ライナは土をいじる手を休め、雲ひとつない青空を見上げました。

なにか、空から声が聞こえたように、思ったからです。

いつの間にか、額にうっすらと浮かんでいた汗をライナは手の甲で軽く拭き取りつつ、真剣な瞳で、その青い空を見上げていました。

しばらくそのままの格好で時を過ごしたライナでしたが、ふとそよいた涼しげな風に、鬢に落とした長い髪がふわりと揺すられた時、うん、と小さくうなずきました。

途端にライナは、土をいじっていた移植ゴテをその場に突き刺し、なにかかもほっぽりだしたまんま、あたふたとおうちの内へと入って行ってしまいました。

前庭をちらかしたまんま、ライナはなにをしようかの中に入ってしまったのでしょうか。

時々、そんなライナを見かけた村の人達は、ちょっと寂しそうに言います。

ああ、なんてことだ、ライナが誰かのお願い事を聞いてしまった、と。

そして、ほっぽりだしてある彼女の前庭の世話をちょっとだけ、植わっているハーブと野菜とが枯れずにちゃんとしていられるだけの、お世話を焼いてあげるのです。

ライナが誰かのお願い事を叶えた後、また前庭いじりをする楽しみを残しておいてあげるために。

でも、ライナがお願い事を叶えるためにうちに入ってしまったから出てくるまで、たっぷり半日はかかります。

もし、なにもなければお昼御飯までに前庭いじりは終わり、午後はそのハーブの植わった前庭の脇に置いてある揺り椅子の上にその小さな身体をちょこんと載せ、すやすやとお昼寝をするライナの姿を、村の人達は見る事ができるというのに。

村の人達は、その幸せそうに眠るライナのかわいい寝顔を見るのが大好きなのです。

夏の夜空に流れたお星様に籠めた、あなたのお願い事はなんなのでしょう。

そうです、あなたのお願い事の籠められたお星様のひと滴は、朝、ナスビの葉の上にちょこんと載っているあのひと粒の朝露なのです。

でも、そんな朝露の中には、お願い事がなくなってしまうものがあるのです。

だからライナはそんなかわいそうな朝露を毎朝毎朝、少しでもたくさんのお願い事が叶うようにと、集めてあげているのです。

だってどこかで落っこちてしまったお願い事も、そのお願い事をした人の願いがとつても強いと、元々あった星の滴の朝露に、たどり着くことができるのですから。

でもそれも、朝日の輝きを朝露が浴びるまで。

朝日の輝きは朝露から魔力を消し去るだけじゃなく、小さな小さな星の光までも消してしまい、お願い事は行き着く先を失ってしまう。

ライナが聞くお願い事は、そんなとつても強い願いの籠もったお願い事。

だから彼女はそんなお願い事を、叶えてあげたくて……叶えてあげたくてしょうがないのです。

じゃあ、お願い事が落っこちている朝露ってなんなのでしょう。

それは、そう、さっきも言いましたね、このお話をベッドで聞くまでに言ってしまったお願い事。

だからまだ言わずに我慢なさい、あなたが星降る夜空に願ったその事が、ミンサシャのナスビ畑のナスビの葉の上に届くように。

願いの籠もった朝露は、朝日に星の光をなくしても、その願いはちゃんと葉っぱからナスビの実の中へと、籠められるのですから。

そしてそのナスビを食べた人がおいしいって言った時、あなたが願ったお願い事、それはきつときつと……叶いますよ。

ミンサシャのライナ、小さな魔女も、ナスビが大好きなんですって。

おやすみなさい、あしたはナスビ、食べようね。

おやすみなさい、小さな魔女のライナさん。

おやすみなさい……。

おしまい